

# オンラインヒューマンライブラリーの実践と考察

関 久美子

## Practice and Discussion of Human Library Online

Kumiko Seki

### 1. はじめに

ヒューマンライブラリーは、「障がい<sup>1</sup>をもっていたり、人種的なマイノリティであったりすることで人々から近づきにくいと思われたり、偏見を受けやすい立場にある人が、『本』となって30～45分程度貸し出され、『読者』は1対1で、あるいは1対数人でその『本』の語りに耳を傾け、対話がなされるという特別な『図書館』（イベント）である」（横田2012, p. 155）。「図書館」という仮想空間で多様な価値観や属性を持つ人が「本」となり自己のライフストーリー、生きづらさ、想いや考えを自由に語り、参加者は「読者」となりその「本」と自由に対話をする。この対話を「読書」と呼ぶ。心のバリアを溶かし、偏見を低減することや、多様性に寛容な心を育てる等の実践的な試みとして各地で開催されている（坪井 2017, p. 65）。筆者の所属する新潟青陵大学・新潟青陵大学短期大学部社会貢献センター（以下：新潟青陵大学・短期大学部社会連携センター）では「ふわりとつつむ」をテーマに地域の多文化共生を目指し、さまざまな障害やセクシャルマイノリティなどに焦点を当て「インクルージョン講座」を開催してきたが、その講座のひとつとして2018年からこのヒューマンライブラリーを開催している。2019年には、「天皇陛下御即位記念 第34回国民文化祭・にいがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会<sup>2</sup> 障害者芸術・文化事業」の一企画としてヒューマンライブラリー新潟実行委会（新潟青陵大学・短期大学部社会連携センター／新潟医療福祉大学シティズンシップ教育実践研究センター）が実施主体となり「ニイガタヒューマンライブラリー 2019」を新潟市では本学を会場に、また新発田市でも開催した。この2年間、本学で開催されたヒューマンライブラリーだけでも、のべ約40名が「本」として、そして200名以上が「読者」として参加している。

過去2回のヒューマンライブラリー開催を踏まえ、アクセシビリティの工夫、情報保障の確保といったソフト面でのバリアフリーの強化、また「対話」の質の向上など今後への課題が明らかにされ（関

---

<sup>1</sup> 「障がい」「障害」の表記に関しては様々な見解によって議論がなされるが、本稿では原則その言葉を使用した者が記した表記に従い、それ以外は「障害」の表記を使用する。

<sup>2</sup> 天皇陛下御即位記念 第34回国民文化祭・にいがた2019、第19回全国障害者芸術・文化祭にいがた大会開催概要 ([pref.niigata.lg.jp/site/bunkashinko/1356867183480.html](http://pref.niigata.lg.jp/site/bunkashinko/1356867183480.html))

2020, p125-127.)、2020年はそれらの課題への挑戦の年でもあった。しかし同年1月に初めて国内で感染が確認された新型コロナウイルスはその後も猛威を奮い4月には全国に緊急事態宣言が発令され、5月に宣言は解除されたが、「新しい生活様式」のもとソーシャルディスタンスが推奨され、人の物理的な移動や接触が制限される社会となった。「本」と「読者」が対面で「対話」することがこのイベントでの真価であるにもかかわらず、その「対話」が難しい状況に陥り、従来通りのヒューマンライブラリーの開催が難しい状況となった。しかし新型コロナウイルスという未知のものに対する恐怖やソーシャルディスタンスでもたらされた人々の孤立感やストレス、そのような人々の感情が社会をより不安定にし、さらなる偏見や差別を生み出すのではないか。社会における不確実性が高まる今だからこそ、互いに繋がり互いを理解するための「対話」を絶やしてはいけないのではないかと筆者は考えた。すでに東京ヒューマンライブラリー協会<sup>3</sup>、青森県のJinzai-Japan<sup>4</sup>、ヒューマンライブラリー Nagasaki<sup>5</sup>などが実験的に小規模でのオンライン上のヒューマンライブラリーを実施しており、それらを参考に、2020年11月8日(日)に「ニイガタヒューマンライブラリー@SEIRYO～あなたを知ってわたしを知りたい～」と題して、第3回目となるヒューマンライブラリーをZoom Video Communicationsが提供するWeb会議サービスZoomを利用したオンライン形式で本学でも開催することとなった。本稿ではその実施報告とオンラインという環境でのヒューマンライブラリーにおける考察を主たる目的とする。なお、これ以降、ヒューマンライブラリーでの語り手を「本」、参加者を「読者」とする。

## 2. ヒューマンライブラリー 2020実践報告

### 2-1. ヒューマンライブラリー学生司書プロジェクト

「司書」とはヒューマンライブラリーを企画・運営する「主催者」のことである。新潟青陵大学・短期大学部でのヒューマンライブラリーの実施主体は同大学の社会連携センターであるが、実質の準備・運営を担う「学生司書プロジェクト」<sup>6</sup>を一昨年、昨年に引き続き立ち上げた。今年度は大学院臨床心理研究科から1名、大学看護学部から1名、大学福祉心理学部から4名、短大人間総合学科から16名(内、筆者ゼミ生15名)、短大幼児教育学科から1名の計23名がこのプロジェクトに参加した。

「司書」が「本」の最初の理解者になることは、「本への共感性をはぐくみ偏見をなくす」というヒューマンライブラリーの目的を達成するためには不可欠である(坪井, 2021, p. 79)。この「学生司書プロジェクト」において、準備段階で学生司書に求められることは、「本」を理解し、「本」との信頼関係を深めることである。まず7月から8月にかけて毎週水曜日に実際にヒューマンライブラリーで「本」になっていただく方1～2名を迎えて、オンラインでの勉強会を行った。学生司書はこの勉強会を通して、のちに自分の担当する「本」以外の方の話も聴き、社会に共存する多様な人々の存在を知ると同時に、その属性について学ぶことができた。またヒューマンライブラリー本番に向けて「本」にとってはZoomの雰囲気慣れ、操作方法などを確認するリハーサル機能も果たした。7月16日には前述の東京ヒューマンライブラリー協会、青森Jinzai-Japan主催のオンラインライブラリーでPC管理を担当された中林勇人氏(日本ヒューマンライブラリー学会)を講師に迎え、オンライン開催に向けての準備や留意点などについてレクチャーしていただいた。勉強会の詳細は以下の通りである。

<sup>3</sup> <https://www.tokyo-humanlibrary.com/>

<sup>4</sup> <https://www.jinzai-japan.com/>

<sup>5</sup> <https://www.facebook.com/hlnagasaki>

<sup>6</sup> 2020年度新潟青陵大学短期大学部学長教育改革助成金事業として採択

月日	テーマ1	テーマ2	参加学生数
7月1日	眼瞼下垂	デートDV	15
7月8日	セクシャルマイノリティ①	セクシャルマイノリティ②	19
7月15日	聴覚障害	心の病	16
7月16日	オンラインヒューマンライブラリーの開催方法と注意点		20
7月22日	慢性疲労症候群	中途四肢麻痺	16
7月29日	双極性障害	通信高校・不登校	21
8月5日	依存症・自殺未遂	未成年出産	19
8月12日	発達障害・ダブルマイノリティ		17
8月19日	適応障害	ペルテス病・就職難民	15

加えて、学生司書は9月からの夏休みを利用し、オンラインで各自担当する「本」と会い、「本」を紹介するための「あらすじ」を作成した。「あらすじ」はタイトル、「本」の属性を表すハッシュタグ、「本」を紹介するあらすじ本文、そして担当した学生司書からのコメントで構成される。あらすじ本文は「本」が語るライフストーリーを学生司書が自分の言葉で再構築する。またコメントでは「本」の持つ属性や「本」自身に対する学生司書の主観的かつ素直な想いが語られ、また「読者」へ向けてのアピールポイントなども加えられる。これらの活動を通して学生司書の「本」に対するより深い理解が促進され、また人々の多様な生き方に対する共感を高めることができると考える（関他、2019, p. 40）。このあらすじはのちに本学社会連携センターのホームページで公開されている<sup>7</sup>。

## 2-2. オンラインヒューマンライブラリー開催までの準備

オンラインでのヒューマンライブラリーの開催は従来の対面型とは異なり、本番までの準備段階に労力と時間を要する。本来ヒューマンライブラリーは予約不要でありと立ち寄ることもできる敷居の低いイベントとしてデザインされているが、オンラインでは完全予約制の方式を採用した。今回「本」としての16名の多様な属性をもつ方たちが参加して下さったが、次ページの通り、この16名の「本」を2名ずつ組み合わせる8つのブロックに配置、「読者」には希望のブロックをイベント管理・チケット販売サイトPeatix（ピーティクス）を通して予約してもらった。

このシステムでは「読者」は必然的に2名の「本」と対話することになる。各ブロックに主催者側が意図的に属性の異なる「本」を設置することで、「読者」はともすると一方の本来興味のない「本」とも対話することになる。これは従来型のヒューマンライブラリーで起こり得る「偶然の出会い」の再現である。ヒューマンライブラリーでは会場に多様な「本」を用意することで、「読者」が偶然に目にした「本」と対話する機会を故意的に作り出している。「読者」にとってはその偶然の出会いを通して新しい世界に触れることで、社会に存在する多様な属性・価値観への理解やそれらに対する感受性が高められると考える。オンラインでは属性の違う「本」をあらかじめペアにすることで半ば強引に「偶然の出会い」を実現させた。また、対面式のヒューマンライブラリーでは「本」1名に対して「読者」は多くて5名までであったが、オンラインの特性を考慮し3名までと少人数に設定した。

<sup>7</sup> [http://www.n-seiryu.ac.jp/cms/wp-content/themes/seiryu/images/page/extension/ec/2020\\_kouki\\_synopsis.pdf](http://www.n-seiryu.ac.jp/cms/wp-content/themes/seiryu/images/page/extension/ec/2020_kouki_synopsis.pdf)

ブロック	本	タイトル	キーワード (#ハッシュタグ)
ブロック 1	A	車椅子とヘルパーさんとの出会い ～ステレオタイプ・偏見のない世界を求めて～	# 中途四肢麻痺
	B	MIX: たくさんの“個性”を抱えて生きる	# スタージ・ウェーバー症候群
ブロック 2	C	普通高校が当たり前なのか...?	# 不登校 # 通信制高校出身
	D	マイノリティを”知る”ということ	# 発達障害 # LGBT # ダブルマイノリティ
ブロック 3	E	2つの障害と向き合い、第二の人生を	# 双極性障害 # 発達障害
	F	聞こえているけど聞き取れない	# 聴覚障害(中途度難聴)
ブロック 4	G	10分の1の恋愛感情	# アセクシュアル # LGBT
	H	最幸(さいこう)な人生を見つけるために...!	# 摂食障害 # 躁うつ病 # パニック障害
ブロック 5	I	適応障害で悩まされた人生～救ってくれたのは一匹の猫～	# 適応障害 # うつ病 # ひきこもり
	J	未成年での妊娠と出産～子どもができる年齢に正解はあるのか～	# JK ママ # 未成年妊娠 # 未成年出産
ブロック 6	K	難病と向き合い幸せを掴む	# 慢性疲労症候群 # 獣医師
	L	お酒という名のドラッグ	# 自殺未遂 # ひきこもり # アルコール依存症
ブロック 7	M	眼瞼下垂という病気を受け入れ、好きになるまで	# 眼瞼下垂 # 見た目問題
	N	みんなの「普通」説明できますか?～「普通じゃない」って言わないで～	# 不定性 X ジェンダー # パンセクシュアル
ブロック 8	O	多くの困難に立ち向かって...	# ペルテス # 留学 # 就職難民 # 発達障害
	P	相手から離れられない状況で、好きな人の暴力からあなたはどうかやって逃げますか?	# デート DV # トラウマ

「読者」はオンライン上で希望のブロックの申し込みを行うと、本学社会連携センターからGoogleフォームを利用した「同意書」のURLが送られ、その内容に同意し返送することで、当日のオンラインヒューマンライブラリー参加用のZoomのURLとパスワードがメールで送られる。「同意書」は「本」を守るため、安全で安心な対話の環境を確保するために「読者」に提出してもらうものであるが、この「同意書」の有無が真の「対話」を妨げる原因の一つではないかという議論は関(2020, p. 126)他、ヒューマンライブラリー実践者の中で継続的になされている。「同意書」には「『本』を意図的に傷つけてはいけない」という文言が含まれるが、これが「読者」に制約を課し、対話への積極的な参加を躊躇させる可能性もあるのではないか。2020年11月に青森で行われた従来型の対面でのヒューマンライブラリー<sup>8</sup>は敢えて「読者」にこの「同意書」の提出を求めずに開催された。しかし今回はオンラインという特殊な状況下において、スクリーンショット撮影、対話の録画や録音などが安易に可能になることから、「本」

<sup>8</sup> 青森県Jinzai-Japanの主催でカフェを会場に有料参加という新しい試みでヒューマンライブラリーが開催された。

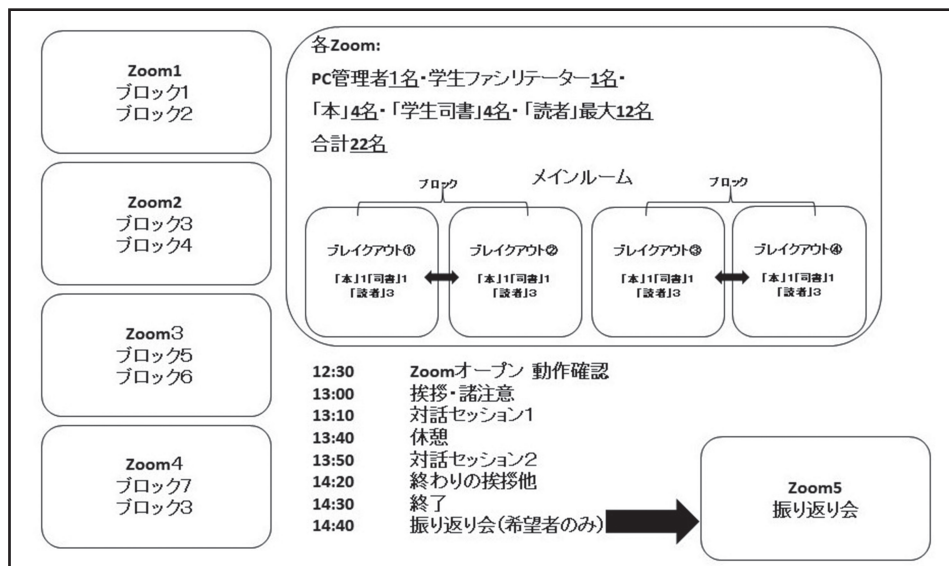
のプライバシーをより厳密に確保するためにも「同意書」の提出を参加条件とした。「同意書」では前述の通り、「故意に『本』を傷つけない」こと、撮影・録音の禁止に加え、原則カメラをオンの状態での参加、申込した「読者」以外の同席者の禁止（介助者等はのぞく）、Zoom参加のためのURLを他者へ譲渡することの禁止などを盛り込んだ。また「本」を守るためだけではなく「読者」を守るという意味で、「読者」の対話からの退席も自由である旨も「同意書」を通して周知した。

### 2-3. オンラインヒューマンライブラリー開催（当日の流れ）

2020年11月8日（日）「ニイガタヒューマンライブラリー@SEIRYO ～あなたを知ってわたしを知りたい～」<sup>9</sup>の本番を迎えた。当日はZoomのミーティングルームを4つ開き、各ミーティング内にブロックを2つずつ設置した。すなわち「本」役4名、「読者」最大12名（各「本」に対して「読者」が3名まで）がそれぞれのミーティングルームに参加することになる。加えて各「本」を担当する学生司書が4名、ミーティングルーム全体をまとめる学生司書（以下：学生ファシリテーター）1名、PC管理者<sup>10</sup>1名の合計22名が参加するミーティングルームを4つ同時に展開することで、「本」16名、「読者」40名という大規模なオンラインヒューマンライブラリーを実現させた。

各Zoomミーティングルーム内の流れは次の通りである。当日は13時開始であったが30分前からZoomミーティングを開始し、Zoom操作に慣れない参加者への準備時間とした。13時、学生ファシリテーターによる導入のあと、PC管理者によってミーティングルーム内に対話の部屋として4つのブレイクアウトルームが作られ、予約申し込みに基づいて「本」、「司書」、「読者」が割り振られる。対話は1回30分とし、所定の時間にそれぞれのブレイクアウトルームに移動、1回目の対話が終了すると、「本」と「司書」のみメインルームに戻る。このメインルームが従来のヒューマンライブラリーの「書庫」（「本」の休憩所）としての機能を果たす。10分間の休憩を挟んでPC管理者が「本」と「司書」を入れ替えるかたちで2回目の対話が始まる。終了後は参加者全員がメインルームに戻り終了となる。その後、希望者のみで別のZoomミーティングに移動し振り返り会を行った【図1】。

図1



<sup>9</sup> 本学でのオンラインヒューマンライブラリー当日の様子はBSN新潟、NHK新潟の番組内で紹介された。

<sup>10</sup> PC管理者にはZoomの操作に精通した者として、筆者を含む社会連携センターの教職員3名、オンラインヒューマンライブラリー開催にあたりアドバイザーとして協力いただいた日本コミュニケーション学会の中林勇人氏1名の4名があたった。PC管理者はZoomの有料アカウントを利用して安定した作業を行うため有線のコンピュータを利用した。

## 2-4. 学生司書の役割

当日、学生司書は大学に集合し、各Zoomのミーティングごとに大教室に分かれ、ソーシャルディスタンスを保ちながら運営にあたった【写真1】【写真2】。オンラインヒューマンライブラリーでは「司書」の役割が要となる。Zoomのブレイクアウトルームという閉鎖的な空間で初対面同士の「本」と「読者」の対話を円滑に進めるための雰囲気づくりや、時として対話をファシリテートする役割も必要となる。学生司書の大半はオンラインでのヒューマンライブラリーはもとより、従来型の対面式でのヒューマンライブラリーの経験すらなく、本番まで多様な場面を想定してシミュレーションを重ねたとは言えかなりの緊張を要するものだったと伺える。

まずファシリテーター役の学生司書はZoomミーティングのメインルームでの進行が主な仕事となる。ミーティングルームに随意入室してくる「読者」への声がけや、画面に表示される名前の変更のお願い、必要であればその操作方法の指導の他、導入として簡単なヒューマンライブラリーの紹介、「同意書」の確認、すべての対話終了後にはまとめの挨拶などを行う。また「本」を担当する学生司書は「本」とともにブレイクアウトルームに参加、基本カメラ・マイクをオフにしてその場の様子を確認しながら安全な対話環境の確保に努めるが、対話が滞った時などは進行役として対話を促進する役割を果たさなければならない。学生は遠隔授業を通してZoomの操作的なことには十分に慣れているが、自分主導でそこに参加する者同士のインタラクションを促すような経験はおそらくどの学生司書にとっても初めての経験であった。ブレイクアウトルームという「密室」で対話が問題なく進行するかどうかは、最終的には担当する各学生司書に委ねられるが、結果、苦戦する中も無事にその役目を果たしてくれたと考える。



写真1



写真2

## 2-5. 振り返り会

振り返り会とはそれぞれがヒューマンライブラリーでの体験を通して感じたことを他の参加者と共有する機会である。それぞれの対話空間でそれぞれが得た新たな気づきを参加者全員で語り合うことによって、自分の個人体験世界が、参加者全員の体験世界として共有される(坪井、2021, p. 56)。青陵大学・短期大学部で開催されたヒューマンライブラリーにおいてこの振り返り会が実施されるのは初めてであるが、今回はヒューマンライブラリー終了後、「本」「読者」「司書」の全体の参加者うち有志50名ほどがこの振り返り会に参加した。ディスカッションクエストとして①ヒューマンライブラリーを通して何を得たか、②ヒューマンライブラリーで得た経験を今後どう生かしていくかという2つテーマのもと、ブレイクアウトルームで4～5人で話し合ってもらい、その後メインルームでグループごとの意見を全員で共有した。

### 3. オンラインヒューマンライブラリーにおける考察（アンケート結果から）

#### 3-1. オンラインヒューマンライブラリーのメリットとデメリット

「本」「読者」「司書」から回答してもらったアンケート結果をもとに、まずはオンラインヒューマンライブラリーのメリットとデメリットについて整理したい。

メリットとして最初にあげられたのは「参加のしやすさ」である。コンピュータやタブレット等の機器がありWi-Fi環境が整っていれば、国内・国外問わずどこからでも気軽に参加することができる。会場までの往來の必要がない分、時間の制約も軽くなる。身体的な障害のために物理的な移動が難しい場合や、心の病等で外出が困難な参加者にとってもオンラインであれば自宅から参加することが可能である。そして自宅からの参加ゆえリラックスできたという意見もあった。例えば本や写真、小物など「そういえばこんなものがあった」と部屋にあるアイテムを見せながら対話できるのは、従来のヒューマンライブラリーにはない別のライブ感がある。

次にあげられたのが「全国の人々と繋がることの喜びを感じられる」という点である。実際に今回のヒューマンライブラリーでは「本」の16名のうち3名が、そして「読者」の40名中半数が県外からの参加であった。振り返り会でも「もっと全国の人と繋がる機会が欲しい」という意見もあったほどで、多様性の理解と共有といった共通した志を持つ人々が全国から集まるその場は、例え初対面同士がほとんどであっても独特な高揚感と安心感を体験することができる。

そして、「少人数での親密感」を得られるという意見もあった。対面式のヒューマンライブラリーでは「本」に対して「読者」5名までとしている。一方オンラインヒューマンライブラリーでは参加者が多くなればなるほど発話のタイミングが難しくなるため、またスクリーンに映し出される各参加者の画面の大きさを考慮し、「読者」は多くて3名と設定した。加えて、ブレイクアウトルームという閉鎖的な空間が、外界の情報から一切遮断された良い意味での密な空間を作り上げていたのではと考える。

一方デメリットとして、前述した「発話のタイミングの難しさ」があげられた。オンラインの機能上、複数が同時に発話すると聞き取りづらくなる。参加者AとBが話している一方でCとDが話すといったクロストークもできない。Wi-Fi環境によっては音声途切れたり遅延が発生したり画面が固まってしまうこともある。またZoom操作に不慣れな場合は対話に集中することも難しいであろう。これらのことから自由な発言が躊躇され対話のダイナミズムが生まれにくくなる。対話は重なっていくことでそこに気づきや新たな疑問が生じ深みを増していくが、オンラインでは対話の重なりというより、どちらかと言うと一問一答のような断片的なインタラクションになってしまうことは否めない。さらに、これらのことに余計な時間が費やされ、純粹に対話に費やされる時間が短くなり、30分という時間では不十分だと感じた参加者も複数見られた。

次にあげられたのが「相手の体温を感じられない」といった意見であった。また特に発達障害の属性を持つ参加者にとっては画面越しでは相手の表情を読み取りづらいという。オンラインでは相手の微かな表情の変化や場の雰囲気を感じとり、互いの反応や理解の度合いを推測しながら対話を進めることは難しい。五感での交流ができず、参加者心理に働く規範的束縛力や信頼感の醸成が生まれにくくなる。その結果「本」と「読者」間の繊細な感情交流に限界が生じる（坪井、2021, p. 196）ことは否めず、相互作用から生まれるはずの共感・受容・普遍化も制限される。今回のオンラインヒューマンライブラリーにおいて「読者」の多くが対話を通して何かしらの気づきや変化を感じたことはアンケート記述を見ても明らかではあるが、対面式のヒューマンライブラリーから得られるそれらとは質的・量的にどの程度差異が認められるのかは新たな研究テーマとして非常に興味深いところである。

### 3-2. 今後に向けた留意点

次に、今後オンラインでヒューマンライブラリーを開催するにあたっての留意点を以下にまとめる。

一つ目は「オンラインの『対話』のルールの共有」である。本来自然発生的に発話生まれ、それが重なり合って対話が自由に発展していくことが望ましく、そのような対話がオンラインでも再現されることを期待していたが、機能上同時発話に限界があり、また初対面同士が参加する場合は特に難しいことが分かった。さらに言語的・非言語的フィードバックが伝わりづらいのも確かである。そうであれば、「司書」が司会進行役を務める、挙手をしてから発言する、さらにはフィードバックとして大きく頷いてみる、機能としてある反応のボタンを押してみるなど、機械的ではあるがそのようなルールを作り、最初に参加者で共有することで参加者も発話もしやすく対話もよりスムーズに進むのではないか。ヒューマンライブラリー実践者としては、従来型のヒューマンライブラリーのダイナミズムを可能な限りオンライン上でも再現したいと考えてしまうかもしれないが、むしろ画一的な方法を取ることでオンラインでの対話を最大限に促進させられるのではと考える。

次は「導入の工夫・緊張緩和の工夫」である。今回はオンラインでのヒューマンライブラリーということで、ある程度ヒューマンライブラリーに関して予備知識がある、または参加経験がある「読者」が多いのではと予測していたが、意外にもそして喜ばしいことに、そうでない「読者」の参加も見られた。次にオンラインで開催する時には、そういった「読者」に対して、「本」との対話に入る前に、ヒューマンライブラリーの始まりや歴史、その意義や効果についてなどを紹介する導入的なセッションを設けることで、より理解が深まり「対話」に参加する準備が整うのではないかと考える。またこれは「読者」に限らず「本」も含めて、従来の対面式のヒューマンライブラリーと比較し、オンラインという特殊な状況では緊張の度合いも異なるであろう。学生司書には参加者の緊張を解すようになるべく声がけをするよう指導していたが、学生司書にとってもそれは難易度の高いタスクである。コロナ渦でオンラインでのコミュニケーションが一般化してきている中、オンライン上でできるアイスブレイキングを紹介するサイトも多数ある。アイスブレイキングであれば学生司書の主導で行える。そのようなアイデアを積極的に導入することで緊張緩和、雰囲気作り繋げていくことが可能であろう。

最後は「『本』と『司書』の信頼関係」についてである。アンケートでは、多くの学生司書が「本」と信頼関係を築くことの重要性に言及していた。信頼関係を築くことで対話をよりスムーズにファシリテートできたはずであるという反省の声も見られた。今回は「本」を招いた勉強会も、「あらすじ」作りのための「本」へのインタビューもすべてオンラインで行い、「本」と対面することは一度も叶わなかった。そのような状況で「本」との十分な信頼関係が築けなかったと感じる学生もいたのであろう。これは不可抗力であり学生の責任ではない。ただ学生司書を指導する立場として、「本」との信頼関係の重要性に関しては今後も学生に十分に伝え指導していかなければならない。次回ももし「本」と対面することができない状態であれば、他にどのような方法で「本」との関係性を築いていけるか、これは学生とともに考えていきたい。

## 4. おわりに

新型コロナウイルス終息の兆しが見えない今、今後オンラインでのヒューマンライブラリーは全国でも積極的に開催されることが予想される。オンラインヒューマンライブラリーにはメリットとデメリットがあるが、そのメリットを最大限に活用し、デメリットをいかに克服していけるか引き続き検討していきたい。そして最大のメリットとして、どこからでも参加できる点があげられたが、2020年11月



世田谷オンラインヒューマンライブラリー（東京ヒューマンライブラリー協会）、2021年2月「ながさき・愛の映画祭」の一環として行われたオンラインヒューマンライブラリー（ヒューマンライブラリー Nagasaki）などではより積極的に多様な地域から「本」「司書」を募り開催されており<sup>11</sup>、今後も地域を超えた繋がりを見せていくであろう。また、身体的・社会的障害がある人でも参加が可能という点もあげられたが、これは非常に重要な視点である。オンラインヒューマンライブラリーはコロナ渦における従来型の対面式ヒューマンライブラリーの代替案では決してなく、むしろそういった人々が社会と繋がり社会に発信していける場として積極的に活用していくべきである。そういった点から、新型コロナウイルスが終息し対面式のヒューマンライブラリーの開催が可能になったとしても、オンラインヒューマンライブラリーはそれと並行して継続していく価値があるものと考ええる。

#### [引用・参考文献]

関久美子・岩森三千代・池宮真由美・佐藤裕紀「ヒューマンライブラリーの実践と学生への教育効果：多様性の理解を目指す試みとして」新潟青陵大学短期大学部研究報告、49、2019. 3、25-41項。

関久美子「ヒューマンライブラリーの実践と今後の課題」新潟青陵大学短期大学部研究報告、50、2020. 3、125-127項。

坪井健「ヒューマンライブラリーから見た異文化間能力—コンピテンシーを育てる実践の立場から」異文化間教育、45、2017. 3、56項、65-77頁。

坪井健『ヒューマンライブラリーへの招待：生きた「本」が語りの心のバリアを溶かす』明石書店、2021、79項。

横田雅弘「ヒューマンライブラリーとは何か—その背景と開催への誘い」加賀美常美代・横田雅弘他編著『多文化社会の偏見・差別：形成のメカニズムと低減のための教育』明石書店、2012、150-171頁。

---

<sup>11</sup> 新潟からも世田谷オンラインヒューマンライブラリーには「本」1名、「司書」1名、「ながさき・愛の映画祭」オンラインヒューマンライブラリーにも同じく「本」1名、「司書」1名が参加した。